志賀直哉年譜考（十五）

――明治四十二年一月から六月まで――

生井知子

明治四十二年（一九〇九）（数え二十七歳・満二十五歳～二十六歳）

1・1（金）　直哉は、有島武郎から以前教えられたホイットマンの『アダムの子等』を読んでおどかされた。（M42・1・11有島生馬宛書簡）

「麦」第六号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『大島ゆき』、『法隆寺㈠』『回想』『海岸』『二人の乙女』『「休み」』『大晦日』『恋愛かん』掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第六号批評欄・補④P493）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。マントンの消印、麻布二十一日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

1・2（土）　「望野」第二十四号発行か。

武者小路実篤の『病気』（M41・12・27）を掲載か？　直哉の書き込みあり。（『武者小路実篤全集』第一巻・解題）（補④P521）

1・3（日）　直哉は、湯河原から、柳宗悦らと寄せ書きの葉書を図師尚武に送る。直哉・田村寛貞・木下利玄・柳宗悦が湯河原におり、図師尚武も行く予定だったらしい。（M42・1・3図師尚武宛書簡）＊全集では明治四十年のものとされているが

間違い。

この頃　大島にいた里見弴は、湯河原で直哉と合流しようと約束していたが、風で船が出ず、果せなかった。里見弴は湯河原で女中・八重との関係を告白しようと考えていた。（里見弴『君と私』十五）（里見弴『大島ゆき』）（M42・1・11有島生馬宛書簡）

1・6（水）　直哉は湯河原から帰京。（M42・1・11有島生馬宛書簡）

1・7（木）　柳宗悦が直哉に葉書を書く。湯河原からは昨日帰ったのか、里見弴は風で大島に閉じ込められたそうだね、Schmidの十九世紀絵画史が二冊あるから暇なら明晩来給え、など。（『柳宗悦全集』）

1・8（金）　午後一時、直哉は「麦」第六号に批評を記す。正親町公和の所に行き、その後、横浜に行き、ゼーマンの絵でも探す予定。（「麦」第六号批評欄）

岩下家一が帰朝。志賀家の二階で、直哉、直方、黒木、堀田、小杉、安場らと語り明かす。（M42・1・11有島生馬宛書簡）

1・9（土）　木下利玄は小説『宿（しゅく）』を無理にまとめる。午後四時、正親町家に、正親町公和、直哉、武者小路実篤、木下利玄の四人が集まる。「望野」第二十五号を綴じる。三百頁ほどある。第二十三号までをばらばらにし、原稿を筆者のもとに戻す。（木下利玄日記）

「望野」第二十五号には、木下利玄の『除夜』が載った。（「麦」第六号批評欄）

1・11（月）　直哉は『百舌』を完成。のちに『挿話』と改題。（T11・7「先駆」）

直哉は、有島生馬に手紙を書く。去年の八月から暮れまでに書いた物の一部と三十九年に書いた処女作を一ヶ月以内に有島生馬に送るとのこと。（M42・1・11有島生馬宛書簡）

1・15（金）　直哉は、夜十二時、東京にて『小説　神経衰弱』を完成。（『鳥尾の病気』草稿）

1・16（土）「望野」第二十六号発行か。

「麦」第七号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『弱き人々』『朝鮮芝』『大島の女』、菅田敏光の『法隆寺』、正親町実慶の『山百合』、田中治之助の『書記』『人生』『煩悶』、児島喜久雄の『うつろ』、園池公致の『京都では』、中村貫之の『原稿強制』掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第七号批評欄・補④P493～494）

1・17（日）武者小路実篤が直哉に「望野」第二十六号を読み、『モヅ』が一番いい、『神経衰弱』も面白いと評する葉書を送る。（『武者小路実篤全集』）（→「ノート9」補⑥P243『〈モヅ〉』）

1・21（木）直哉は『往来』「㈠癈兵」を執筆。（未定稿72）

1・22（金）直哉は「麦」第七号に批評を記す。（「麦」第七号批評欄）

1・23（土）午前、直哉は武者小路実篤を訪問。木下利玄が来ている。木下利玄は『紅薔薇の簪』という短篇を書く。「望野」第二十七号を綴じる。木下利玄は「麦」第七号の『山百合』『弱き人々』を読む。（木下利玄日記）

1・24（日）直哉は『往来』「㈢あげやうか？」を執筆。（未定稿72）

1・30（土）「望野」第二十八号発行か。

「麦」第八号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『二時（新体詩）』『猫』『渡し』、田中治之助の『間』『博士』、正親町実慶の『寂しさ』、園池公致の『空想』、『法隆寺』『価値なき善』『山の一軒家』掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第八号批評欄・補④P494～496）

1・31（日）有島武郎が、吹田順助（作中・井田）に《妹が道ならぬ恋の為めに死なんとした事や、弟に夫婦約束をした女のある事や、其の他其の友達の上に起つた事迄も大胆に打開いて物語つた。》（有島武郎『半日』）

2・1（月）柳宗悦が直哉に葉書を書き、柳宗悦・郡虎彦による「桃園」第一号発行と知らせる。十二行二十五字詰めで百十四頁。

（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

2・6（土）「望野」第二十九号発行か。

直哉は、アナトール・フランスの“Red Lily”（『赤い百合』）を読了。（「手帳13」補⑥P39）

＊対談『志賀直哉氏の文学縦横談』によれば、アナトール・フランスが社会主義的な傾向を持っていたので、惹き付けられて、しきりに読んだと言う。

2・7（日）直哉は咽喉を害し、この日から一週間寝る。（「手帳13」補⑥P39）

2・9（火）夜十時、直哉は病床で「麦」第八号に批評を記す。（「麦」第八号批評欄）

2・12（金）直哉は『ポーツマス（反古っ紙）』を執筆。（未定稿74）

2・13（土）「望野」第三十号発行か。

2・14（日）「麦」第九号発行。（里見弴『君と私』二十二）（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『過去の人（梗概）』『写真解（えとき）』、園池公致の『神の愛を受け入れんとて』掲載。（里見弴『雑記帖』）（里見弴『君と私』二十二）

柳宗悦・郡虎彦が「桃園」第二号発行。柳宗悦の『ハーンを憶ふ』『吾れは恐る吾れは求む』『山恋ひ（小説）』、郡虎彦の『音楽会』『人妻（小説）』『灰（夢語り）』が掲載され、七十四頁だった。（M42・2・17志賀直哉宛柳宗悦書簡）

「桃園」は第三号まで出た。（座談会『「白樺」座談会』）

2・15（月）牛込の曾祖母・高橋イハが死去。（「手帳13」補⑥P39）

2・17（水）柳宗悦が直哉に葉書を書く。御病気はもう全快のことと思う、「桃園」第二号は十四日に発行したが、郡虎彦が走っている電車から落としてしまった、など。（『志賀直哉宛書簡』）（『柳宗悦全集』）

2・18（木）岩下家一が満州へ出発。曾祖母・高橋イハの葬式。（「手帳13」補⑥P39）

2・19（金）　直哉は「手帳13」（ImpressionsXVI）を使い始める。（新『志賀直哉全集』補⑥P18～）

2・20（土）　「望野」第三十一号発行か。

直哉は、二十二日まで武者小路実篤と共に、沼津の正親町公和を訪問。（「手帳13」補⑥P39）

＊『暗夜行路』草稿13の廿一には、正親町公和が父との面白くない関係を避け、一年間ほど、沼津の桃郷で自炊しながら、本を読んだり、絵を描いたり、沢山の小品文を書いたりして過ごしていたこと、直哉がその小品文を好んだこと、二三度そこを訪ねたこと等が書かれている。

この時か？　沼津の正親町公和を武者小路実篤と直哉が訪問した際、土産に“Studio”を一冊持って行き、表紙に直哉がブッシュの滑稽画を写した。（「白樺」M45・2「編輯室にて」）

2・21（日）　「麦」第九号に直哉は《今度は批評を御免蒙る、沙鷗の寓居にて、志賀》と記す。（「麦」第九号批評欄・補④P497）

直哉は、沼津にて『小説　若い銀行員』を完成。（『無邪気な若い法学士』草稿）

2・22（月）　直哉は、アナトール・フランスの“The Crime of Sylvestre Bonnard”（『シルヴェストル・ボナールの罪』）を読了。（「手帳13」補⑥P39）『若い銀行員』の単行本の表紙を考える。（「手帳13」補⑥P20）

2月最後の一週間から

翌月の第一週にかけて、直哉は“Current Literature”“Bookman”を拾い読みする。アンドレーフの“Lazalus”（『ラザルス』）が最も心を惹く。モーリス・バレス、カルドゥッチ、エドガー・ソルタス、画家ダボ兄弟らの名を知る。（「手帳13」補⑥P39）→未定稿90『伊詩人ジョッセー。カルデュッシー』（一昨年四月のカーレント、リテラチュアより）

2・25（木）　武者小路実篤が『覚え帳』を執筆。《この頃の自分は無鉄砲のことがしたい。（中略）それは今の自分には雑誌をつくることだ。》と記し、「望野」に出す。（武者小路実篤『旧稿の内より（潔の日記）』）

2・27（土）　直哉は『夜は更けた』を執筆。（未定稿75）

「望野」第三十二号発行か。

2・28（日）「麦」第十号発行。（武場隆三郎『白樺の人々』）

里見弴の『荘田さんの手紙』（＊山本愛子と増田英一がモデル）、正親町実慶の『所感』『合唱』『彼と鏡』、中村貫之の『死』、田中治之助の『二郎さんと三郎さん』、「新体詩」『イゼルギル婆さん』掲載。（「麦」第十号批評欄・補④P497）

2末より　祖母・志賀留女が病気。（「手帳13」補⑥P39）

3・2（火）直哉は、木下利玄・武者小路実篤・勘解由小路資承・福谷次郎と写真を撮影した後、三越に雛人形を見に行き、丸善へも寄る。（『新潮日本文学アルバム　志賀直哉』掲載・写真）

3・3（水）武者小路実篤が『男女交際論について』を執筆。「望野」に出す。（武者小路実篤『旧稿の内より（潔の日記）』）

3・5（金）直哉は、プレミスラフのヴァイオリンを聞き、嘗てない程の感動をする。（「手帳13」補⑥P39）

3・6（土）直哉は三河台にて『小説　恐ろしい一夜』（二十枚）を執筆し「望野」に出す。（未定稿76）（「手帳13」補⑥P39）

「望野」第三十三号発行か。

3・7（日）有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ピサの消印、麻布二十八日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

3・8（月）直哉は、木下利玄に、十日の打合せの絵葉書を書く。（M42・3・8木下利玄宛書簡）

木下利玄が直哉に、十日のプレミスラフの音楽会についての葉書を書く。（『志賀直哉宛書簡』）

3・9（火）志賀直温、豊前採炭株式会社監査役を退任、取締役に選任される。（志賀家系図）

3・10（水）直哉は『小説　納豆売の女』を書き上げる。（未定稿77）

直哉・武者小路実篤・木下利玄ら「望野」「麦」同人八名で、午後七時より青年会館で開催されたプレミスラフの音楽会に行く。（M42・3・8木下利玄宛書簡）（M42・3・8志賀直哉宛木下利玄書簡）（「手帳13」補⑥P39）

3・11（木）午後、直哉は武者小路実篤と深川を散歩。（「手帳13」補⑥P39～40）

3・12（金）　直哉は「麦」第十号に批評を記す。（「麦」第十号批評欄）ルネ・バザンの“Redemption”（『全き心を挙げて』）を読了。（「手帳13」補⑥P40）

3・13（土）　「望野」第三十四号発行か。

直哉らは木下利玄の家に集まる。（「手帳13」補⑥P40）

「麦」第十一号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『炭焼人（すみやき）の女房』翻訳『親族会議』、正親町実慶の『愛鳥家』、『のぞきめがね』『誤解』『ごくつぶし』『懺悔とツルゲーネフ』掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第十一号批評欄・補④P497～498）

直哉は『小説　一頁』の構想を考える。（「手帳13」補⑥P20～21）

この頃　翌日にかけて、武者小路実篤が『なまぬるい室』を執筆。「望野」に出す。（武者小路実篤『旧稿の内より（潔の日記）』）

3・14（日）　直哉は、子供を連れて浅草見物。（「手帳13」補⑥P40）

3・16（火）　直哉は「麦」第十号の『イゼルギル婆さん』を読む。（「麦」第十号批評欄）

3・18（木）　木下利玄が直哉に手紙を書く。十九日の消印。今度の土曜の編集は正親町公和の所という話だったが、武者小路実篤の家になった、ドイツ語の試験は駄目だったが、英語の試験は木下利玄も川村弘も名前が出ていた、など。（『志賀直哉宛書簡集』）

直哉は、ブランデスの“Anatole France”を読了。一章を訳す。（「手帳13」補⑥P40）

3・19（金）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ヴェネツィア二十日の消印、麻布四月八日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

3・20（土）　直哉はブランデスの『アナトール・フランス』の一節を『歴史』として飜訳。（未定稿79）

「望野」第三十五号発行。（『武者小路実篤全集』年譜）

3・24（水）　直哉は風邪の病床で「麦」第十一号に批評を記す。（「麦」第十一号批評欄）

3・27（土）「望野」第三十六号発行か。

3・28（日）直哉は上野の音楽会に行く。（「手帳13」補⑥P40）

3・31（水）直哉は、メーテルリンクの“Pelleas and Melisande”（『ペレアスとメリザンド』）を読む。（「手帳13」補⑥P40）

春頃から　直哉と里見弴は、よくぶらぶら歩きをし、《耽溺》と称する。（里見弴『君と私』三十四）

4・1（木）「麦」第十二号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『所感（生殖に就いて）』『二階』掲載。（里見弴『雑記帖』）（里見弴『君と私』二十三、二十四）

里見弴の『所感（生殖に就いて）』の最初の句《吾々自然の大きな意志を認めない訳にはゆかない。》について、直哉は問題が中途から考えられたような気がすると述べる。（里見弴『君と私』二十四）

父・志賀直温がロダンの真筆を買うことを承知し、直哉は終日愉快。（「手帳13」補⑥P40）

4・2（金）直哉は、夜、『小説　なつとう売』を書き上げる。（未定稿78）（「手帳13」補⑥P40）

直哉は、有島生馬に葉書を書く。ロダン自身の鉛筆画が百フランで買えるという話を里見弴に聞いた、武者小路実篤・志賀直哉・細川護立の分、三枚を頼みたいとのこと。（M42・4・2有島生馬宛書簡）

＊『稲村雑談』「ロダンのこと」によると、ロダンのデッサンを買おうと武者小路実篤と直哉が有島生馬にお金を送ったのに、生馬はこちらの方が面白いからとギリシャの古銭を買って来たと言う。

4・3（土）「望野」第三十七号発行か。

4・7（水）直哉は、桃郷に行き、木下利玄・正親町公和と寄せ書きの葉書を、木下利玄の家に送る。（M42・4・7木下利玄宛書簡）

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。東京二十六日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

この頃か？　沼津から帰った直哉は、「麦」第十二号を読む。（「麦」第十二号批評欄・補④P498）

4・10（土）「望野」第三十八号発行か。

4・11（日）里見弴が直哉に自筆の絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）

4・13（火）直哉がCに直接会って話がしたいと書き送ったら、Cが上京したので、別れ話をする。会うのは半年ぶり。この時はCは思ったより平気な顔をしていたが、暫くしてかなり弱る。（M42・5・21、26～28有島生馬宛書簡）（未定稿129『或る旅行記』五）（『暗夜行路』草稿13十六）

4・17（土）「望野」第三十九号発行か。

4・18（日）「麦」第十三号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『努力（偶感）』『コポランの再生』『告白』翻訳『ファルコン』、田中治之助の『聖者』『臆病なる彼』『彼の目的』『晩餐会』、中村貫之の『思ひのまゝに』、正親町実慶の『八月』、武者小路実篤の『空中楼閣』、木下利玄の『女の人』、直哉の『三階の窓から』掲載。直哉は「イタツラカキ」に加わる。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第十三号批評欄・補④P498～500）（里見弴『君と私』二十四）

4・19（月）直哉は、有島生馬に葉書を書く。有島生馬の四十八ページに及ぶ手紙を耽読した、恐ろしいような面白いような妙な気がした、僕は近頃少しばかり心配事がある、など。（M42・4・19有島生馬宛書簡）

4・21（水）？直哉はイプセンの“John Gabriel Borkman”（『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』）を読む。（「手帳13」補⑥P40）

4・22（木）直哉は「麦」第十三号に批評を記す。（「麦」第十三号批評欄）

4・24（土）「望野」第四十号発行か。

武者小路実篤の『旧稿の内より（潔の日記）』の原稿によれば、「望野」は四十号まで出た。（『武者小路実篤全集』第一巻・解題《追記》）

4頃　翌年から雑誌を刊行しようという話がまとまり、金を積み立て始める。（里見弴『君と私』三十八）

毎月二円づつ、有島武郎のみ五円だった。（座談会『「白樺」座談会』）

5・1（土）「麦」第十四号発行。（式場隆三郎『白樺の人々』）

里見弴の『お民さん』、正親町実慶の『八月』、田中治之助の『現実バク露』『独言』、中村貫之の『宇宙』、『鴬とバラ』（オスカーワイルド）掲載。（「麦」第十四号批評欄・補④P500～501）

夕方、直哉・正親町公和・武者小路実篤が集まり、「望野」も先日の冗談通り、分裂する方がよかろうと話し、直哉・正親町公和と武者小路実篤・木下利玄の二つに分かれることになった。（5・2木下利玄日記）

5・2（日）木下利玄が日記に、「望野」は、武者小路実篤・木下利玄の「初袷」（毎週土曜発行）と直哉・正親町公和の「舞羅」に別れる事になったと記す。（木下利玄日記）

5・3（月）直哉はツルゲーネフの“Fathers and Children”（『父と子』）を読了。（「手帳13」補⑥P40）

5・5（水）直哉は「麦」第十四号に批評を記す。（「麦」第十四号批評欄）

5・8（土）頃？

「初袷」第一号発行。

5・12（水）直哉は、イプセンの“The Lady from the Sea”（『海の夫人』）を読む。（「手帳13」補⑥P40）

5・14（金）神戸衛生院の園池公致が直哉に絵葉書を出す。十五日の消印。長く借りていた絵の本三冊を返すとのこと。（『志賀直哉宛書簡集』）

5・16（日）「麦」第十五号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴の『最終裁判（一幕劇）』、菅田敏光の『建築の意義』、正親町実慶の『八月』、児島喜久雄の「短歌」、中村貫之の『雨の午后』、翻訳二つ掲載。（里見弴『雑記帖』）（「麦」第十五号批評欄・補④P501）

5・19（水）武者小路実篤の家に木下利玄が行き「初袷」の第二号を綴じる。直哉も訪れ、「望野」の第二十六号から第四十号ま

でをほぐす。（木下利玄日記）

この頃か？　有島生馬とモデルとの関係を直哉が里見弴に話す。翌朝、里見弴は直哉に長い手紙を書く。これより少し前に、里見弴は直哉に、自分が女と関係しているという事をごく概念的に告げていた。（里見弴『君と私』二十五）（M42・5・21、26～28有島生馬宛書簡）

5・21（金）、26（水）～28（金）

直哉は、有島生馬に手紙を書く。雑誌の発行は大した抱負があるわけではない、自分は何か出版するなら単行本で出したい、雑誌熱を出すのは、いつも武者小路実篤。十人ほどの人で月々二円ずつ集めて準備している。画人伝を単行本で出すのは少し延ばし、雑誌に出すことになった。今までの作品十一篇を一冊に綴じてあるが、有島生馬に愛想をつかされるのが恐ろしいので送るのはやめた。Cの一身について自分が全責任を負うことが実際には無理であると考え、Cに別れ話をした。夏の末か秋の初めにはっきりしたことは決めるつもり。一昨秋に出した長い手紙を見たいので送って欲しい、昨今は読む本は買わず絵ばかり取り寄せている。里見弴に有島生馬とモデルとの関係の話をしたが、かなり参った様子だった。ロダンに直接会ってくれるそうだが、ロダンの絵三枚分の金は百二十円為替で送ればいいか。来年の春くらいまでに有島生馬のいる所へ行きたい、など。（M42・5・21、26～28有島生馬宛書簡）

5・22（土）頃？

「初袷」第三号発行。

5・29（土）頃？

「初袷」第四号発行。直哉も参加。（調布市武者小路実篤記念館・特別展「白樺の文学」）

5・30（日）

「麦」第十六号発行。（里見弴『雑記帖』）

里見弴・正親町実慶の『頸』掲載。（里見弴『雑記帖』）

この頃か？　里見弴は、月経の夜、執拗な男を拒む女の情欲を写した作品を「麦」に出し、どういうつもりで書いたのかと直哉に問われて、Ropsの版画を文章でやってみるつもりだったと答える。（里見弴『君と私』二十四）

この頃か？　直哉は、中耳炎で入院した里見弴を見舞い、ゴヤやムニエなどを貸す。（里見弴『君と私』二十八）

6？　直哉は『濁水』の構想を考える。『大津順吉』の原型ともいうべき作品。登場人物に時任清之助の名あり。《主人公としての自分と、第三者としての自分と二人自分を出すと面白い。》《余裕ある躰度でコセツカヌやうに書かねばならぬ、》《メチニコフの人は自然の生活をせよ》《犬になれ》《自分の五才ノ時――七才の時の事――自分に責任ありと思はす。》《ある点、動物に退化せよ。》《強い〳〵性慾を持ち、それを尊敬すべきである、これを呪ふ宗教（中略）危険なり》等のメモあり。（「手帳13」補⑥P24～28）

6・4（金）　直哉は、有島生馬に、昨日ロダンの絵を買うための為替を送った、里見弴は耳を悪くして東京病院にいると葉書に書く。（M42・6・4有島生馬宛書簡）

有島生馬が直哉に二枚続きの絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十一日の消印。直哉が贈った肉筆の古画を和田三造から受け取った、など。（『志賀直哉宛書簡集』）

6・5（土）頃？　「初袷」第五号発行。

6・10（木）　有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十八日の消印。（『志賀直哉宛書簡集』）

6・12（土）　「麦」第十七号発行。（式場隆三郎『白樺の人々』）

里見弴の『退院』、田中治之助の『信仰』、正親町実慶の「歌」掲載。（「麦」第十七号批評欄・補④P501～502）

直哉は「麦」第十七号の「いたづらがき」に加わり、批評を記す。（「麦」第十七号批評欄）

6・16（水）　武者小路実篤が直哉に葉書を書き、日吉タカとの縁談が身分が違うからという理由で断られた、高島平三郎はもう一

度他の方法をとったらいいという考えを持っていると伝える。（『志賀直哉宛書簡』）（『武者小路実篤全集』）

直哉は、『亀の額』という小説（→「手帳13」補⑥P41）を構想する。（「手帳13」補⑥P29）

6・17（木）有島武郎が直哉からの問い合わせに返事の手紙を出す。札幌には夏期講習会のようなものはないので、郡虎彦のために計ることはできないが、ドイツ語の教師はいるので来たらどうか、とのこと。（『志賀直哉宛書簡』）（『有島武郎全集』）

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。昨日、高島平三郎に、今まで日吉タカとのことが進んできただけでも望外の幸と思うが、一縷の望みがある間は思い切れないという手紙を書いたとのこと。（『武者小路実篤全集』）

6・？直哉は《父は若造りを好む、その原因は母若いから、自分がフケタ様子をしたがる事は父に嬉しくない。非常に自分を恐れてゐる》と手帳にメモする。（「手帳13」補⑥P29）

6・25（金）直哉は、草津温泉などを旅行中の細川護立らに葉書を書き、木下利玄に応桑を通ったら新八（シンパ）を見舞ってくれと言う。（M42・6・25細川護立他四兄宛書簡）

6・26（土）性質の為に常に苦しめられる男の事を書くのは面白いと、直哉は手帳に記す。（「手帳13」補⑥P31）

6・27（日）武者小路実篤が直哉に葉書を書く。『楽天家』は二三日頭の保養をしてから書き続けるつもり、よかったら《タンデキ》しようとのこと。（『武者小路実篤全集』）